宿場の事件簿　―松平壱岐守家中刃傷沙汰事件―

宿場町は、街道沿いに設けられた宿駅であり、上は大名行列から下は一般の庶民まで、多くの人が宿場町を中継し、街道を行き来していたことはよく知られています。今回は、醒井宿で起きた事件のうち、大名行列で起きた刃傷沙汰について米原市所蔵江龍家文書のうち「松平壱岐守様御一宿ニ付入用覚」から見ていきたいと思います。

事件は元禄５年（1692）３月 19 日の晩に発生します。この日、醒井宿には松平壱岐守の一行が江戸への参勤のため宿泊していました。松平壱岐守とは、鳥取藩の支藩・鹿奴藩（しかのはん）（２万５千石）の藩主・池田仲澄（なかずみ）を指します。

この日の夜、藩士で「御歩行衆」（騎乗が許されない下級藩士）の太田彦兵衛が「御手廻」（雑用を務める武家奉公人）の善兵衛と口論になります。この口論の発端など詳細は資料に書かれていないため不明ですが、夜の出来事なので酒に酔ってでもいたのでしょうか。この口論がエスカレートし、とうとう太田彦兵衛は善兵衛を刀で「斬殺」してしまいます。

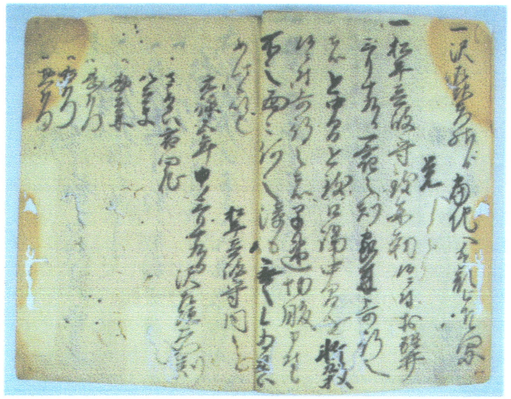
大名にとって、家臣同士の喧嘩については大名家臣団の統制の点からも、厳しく対応する必要があります。今回の場合は、相手を「斬殺」する殺人事件であったため、太田彦兵衛は即刻捕縛され、その日の内に「切腹」が申し付けられました。場所は法善寺で執り行われたとあります。

この時、醒井宿の宿場役人や住民らは、鹿奴藩の家臣から要請を受け、縄・竹・桶・畳の売り渡しや、宿場の公用駕籠の貸し出しをしています。また、殺された善兵衛や切腹した太田彦兵衛の死体の埋葬についても、宿場の住民が鹿奴藩から賃金を貰い執り行っています。

この事件については、宿場の住民や旅人が起こした事件とは異なり、同じ藩の藩士同士が起こした事件であったことから、藩内で即座に処罰が実施されました。おそらくこの裁決は、藩主である池田仲澄が下したものと推測されます。

この事件は、宿場役人らに落ち度があって起きたものではなかったこともあり、宿場役人や死体の埋葬に携わった者たちに、迷惑料としていくばくかの金銭が渡されています。そのうち、宿場役人たちには、金２朱ずつが渡されています。

しかしながら、醒井宿に何ら非がないとはいえ、突如として大名の家臣が起こした殺人事件に、醒井宿の人たちはさぞかし驚き、肝を冷やしたことと思われます。（小野　航）



▲米原市所蔵江龍家文書「松平壱岐守様御一宿ニ付入用覚」

情報 BOX

◆米原市教育委員会では、下記の報告書を刊行しました。

『柏原宿萬留帳調査報告書2
近江国中山道柏原宿三〇〇年の蓄積』

※第２巻は、1749 年から 20 年分の柏原宿の出来事を収録しています。

◆淡海文化財論叢刊行会から、**『淡海文化財論叢　第十輯』**が刊行されました。

※米原市関係者の論考として「古代近江と国際交流」（宮崎幹也）、「霊仙山をめぐる山城」（中井　均）、「塚の越古墳の城郭遺構について」（石田雄士）、「一八世紀、旅行難民をめぐる宿場間相論」（小野航）、「伊吹山とそば栽培」（加藤正樹）、「牧野富太郎と伊吹山」（髙橋順之）があり、多士済々です。

◎問合せは、米原市教育委員会まで。

◆◆編集後記◆◆

滋賀県では還暦を迎えられる先輩方に、大津祭のお囃子が漏れ聞こえる宵宮に、みんなで書いた論集を献呈する集まりがあります■今回 10 輯が刊行されました。きっとほかの県にはないんではないでしょうか、編集者には、いつも感謝感謝です■つたない論考を、おおでをふって、おくめんもなく発表できる場を設けていただき■議論する場？を設けていただき、呑み会の場！を設けていただき、滋賀県の担当者は幸せです■もっともっとみんなが寄稿し盛り上げたい。でもボクは唯我独尊（シャンギリっ子）

米原市文化財ニュース
佐　加　太　第 48 号
発　行　平成 30 年 12 月 10 日
編　集　米原市教育委員会
〒521-0292　滋賀県米原市長岡 1206
米原市教育部　歴史文化財保護課
TEL0749（55）4552

米原市文化財ニュース
佐　加　太

第 48 号
２０１８年12月10日
滋賀県米原市教育委員会

佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

磯出土の懸仏

仏を神の本体とする神仏習合思想のもとで、ご神体の鏡のような円形の板に、神々の本体（本地）にあたる仏・菩薩の像を現わしたものを「懸仏（かけぼとけ）」といいます。各地の神社に奉納され、掛けられていました。社殿に仏の像を掲げるという点から、神仏習合をもっともよく示す文化財のひとつといわれます。

昭和 12 年(1937) 1 月、磯崎神社（磯）付近の水田中から１枚の懸仏が発見され、長く発見者の自宅で保管されてきました。直径 10・2 センチの銅製の丸い鏡板の中央に、像高３・２センチの鋳銅製鍍金（金メッキ）の本尊・釈迦如来像と薄銅板鍍金の光背を取り付けた作品で、懸仏の基本的な形状です。両肩に一対の半円形の突出部を造り出し、穴をあけて懸けられるようになっています。鏡面には、他の付属品や銘文などは一切なく、シンプルな造りです。

制作時期は、本尊や光背の造形から、南北朝時代のものと推定されます。磯崎神社の本地仏の可能性も想定されますが明らかではありません。水田中からの出土は、明治の廃仏で廃棄されたことも考えられます。米原市は、山岳仏教、神仏習合が盛行した地ですが、多くの文化財が失われ、懸仏の遺存例もわずかです。この懸仏は、小品ながら中世の信仰の様態をうかがわせる貴重な遺品です。

▲磯出土の懸仏（米原市教育委員会蔵）

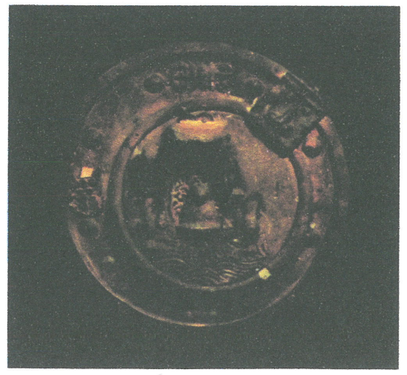
日撫神社の懸仏

日撫神社（顔戸）には、三面の懸仏（市指定文化財）が伝えられています。いずれも、ご神体の少彦名命の本地仏である薬師如来像を現しています。その上には仏に差し掛ける笠・天蓋をつけ、左右に花瓶を配置しています。仏像の足元には扇形を波に見立てた幾何学模様・青海波文を現しています。この模様には未来永劫の願いが込められています。周囲にも飾り金具を多く付けて、全体を荘厳にしています。

このように、鏡面の装飾化が発展するのは室町時代の特徴で、直径も 26 センチ前後を測ります。また、裏板に墨書があり、永禄８年（1565）と同９年に「今井家政」が奉納したことがわかり貴重です。同じ懸仏でも、南北朝時代のシンプルで古い様相を示す磯のものとはかなり異なります。

懸仏は、一般にはほとんどなじみのない文化財です。神仏習合思想が普及する平安後期から造られはじめ、中世を通じて全国的に広がりますが、江戸時代には絵馬がその代用となります。忘れられてしまった最大の理由は、明治初年の神仏分離・廃仏毀釈で神社から仏教的なものが取り払われ、作品が失われ、その信仰すら絶えてしまったことにあります。多くの日本人は、年末年始、クリスマスを祝い、除夜の鐘を聞き、初詣に行きます。ご神体の鏡を起源とする円形板のなかに、仏像を現す懸仏は、日本人の宗教観をうかがうことのできる格好の文化財なのです。

（髙橋　順之）



▲懸仏（日撫神社／市指定文化財）

牧野富太郎と伊吹山の本草学

近世本草学を支えた伊吹山

中国古来の学問で、植物が持っている医薬の効能を解明するものを「本草学（ほんぞうがく）」といいます。伊吹山は薬草をはじめ多くの植物が自生することで古くから知られていました。享保５年（1720）、将軍徳川吉宗は薬草の栽培、採集を奨励し、国産品の開発につとめました。本草学者の丹羽正伯らに命じ、諸国で薬草を採集させ、各地に薬草園を開いて栽培を研究させました。

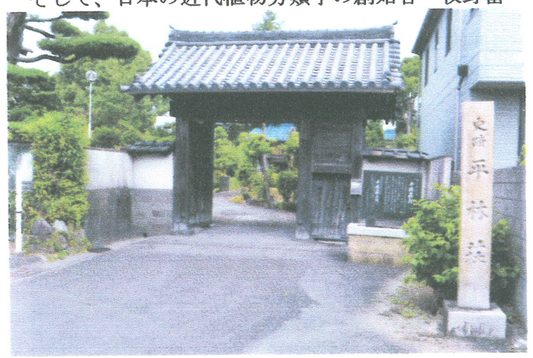
伊吹山にも同６年５月、丹羽正伯ら５人の本草家および御侍方植村左平次ら３人が同道して、人足 50 人を従えて登山しました。その後、寛保３年（1743）４月にも採薬使植村左平次は薬草検分として伊吹山に登山していることが柏原宿の「萬留帳」に記載されています。

このころ、わが国の本草家は次第に博物学的傾向を帯びてきます。貝原益軒の『大和本草』（1708）を始め、小野蘭山の『重訂本草綱目啓蒙』（1847）、飯沼慾斎の『草木図説』（1856～62）など、日本における近代植物学の礎となった著作には必ずといっていいほど伊吹山産の植物が多数紹介されています。

とくに、日本の植物分類学が出発するときに非常に役立ったとされる飯沼慾斎（1782～1865）の『草木図説』には、伊吹山の植物が多数記載されています。慾斎は大垣の町医者で、文化元年（1804）、本草学の大家小野蘭山に入門して植物の研究を始め、伊吹山（おもに美濃側）を研究の場としました。顕微鏡を入手して精密に観察し、スウェーデンの植物学者リンネの植物分類法をもとに、わが国最初の近代的植物図鑑とされる『草木図説』を完成させました。これは、海外の研究者からもその高い学術性を評価されています。

また、日本最初の理学博士である伊藤圭介は明治６年（1873）『日本産物史』近江部上下を出版、その「薬品及雑草木類」のなかに伊吹山産植物 312 種をあげ、そのうち 28 種については図および記載を入れています。伊吹山の植物が、近代植物分類学の黎明期に果たした役割はとても大きいのです。

そして、日本の近代植物分類学の創始者・牧野富太郎（1862～1957）も、大正２年（1913）、飯沼慾斎の『草木図説』をもとに『増訂草木図説』を編集し、慾斎を「始メテ我邦人ノ学術的ニ草木ヲ分類記載セルモノ」と評価しています。文久２年（1862）、土佐国高岡郡佐川村（現高知県佐川町）の造り酒屋の一人息子として生まれた牧野富太郎が、伊吹山に初めて足跡をしるしたのは、明治 14 年（1881）19 歳のときです。上京した富太郎は帰路、単身伊吹山に向かいました。少年期から小野蘭山の『本草綱目』などに親しんだ富太郎は、そこに多くの植物が登場する伊吹山に登り、「ふもとの宿にもどると、わたしは、夜おそくまで標本づくりに熱中しました」と述べています（「植物採集のすすめ」『牧野富太郎植物記８』）。



▲飯沼慾斎が研究した平林荘（岐阜県大垣市）

牧野富太郎と伊吹の群像

明治 14 年 19 歳の牧野富太郎は、ふるさと高知県への帰途、関ヶ原で同行者と別れ伊吹山へ向かいます。「伊吹山の麓では薬業を営む人の家に泊り、山を案内してもらった。頂上までは登らなかったが（弥高方面であった）色々の植物を採集した。採った植物は紙の間に挟んだりして持ってきた。」と自叙伝で述べています。

牧野富太郎は伊吹山が好きで、日誌や資料から確認できる伊吹来山は、明治 14 年を含め７回を数えます。帝国大学理科大学助手になった明治 26 年（1893／31 歳）、同 31 年、38 年、39 年、これは次に述べる伊吹山での講習会です。さらに、昭和６年（1931／69 歳）、同 10 年にも伊吹山で採集されています。このような活動のなかで、伊吹山麓の人たちとの交流が生まれました。

伊吹山の登山口・米原市上野区の自治体史『写真でふりかえる伊吹山物語　神の山とあゆむ上野人』（2015）の資料収集のなかで、旧家から１点のアルバムが提供され、この中に、「坂田郡教育會主催伊吹植物講習会記念写真」というタイトルがつけられた集合写真がありました。明治 39 年（1906）８月 10 日、場所は春照小学校（現米原市立春照小学校／米原市杉澤）。写真には前後七段にわたって、約 130 人が写っています。この写真には、鮮明ではないものの、中央に黒のスーツと蝶ネクタイを愛着した牧野富太郎が写っています（高知県立牧野植物園にご教示いただいた）。

▲伊吹植物講習会（明治 39 年）

「（明治 39 年８月５日）早朝近江前原（米原の誤記）ニ着ク。前原ヨリ長岡ニ到リ。伊吹山下ノ講習會場ニ赴キ講習ニ従事ス」（日記）。この日から 11 日まで伊吹に滞在して、坂田郡教育会主催の採集会や講習会をおこなっています。10 日には伊吹植物講習会が牧野富太郎を講師に、春照小学校講堂で開催されました。２府 18 県から約 300 名も集まったと回想しています。伊吹山での講習会は牧野富太郎がおこなった最初期の講習会で、のちに日本各地での積極的な教育普及活動のさきがけとなるものでした。

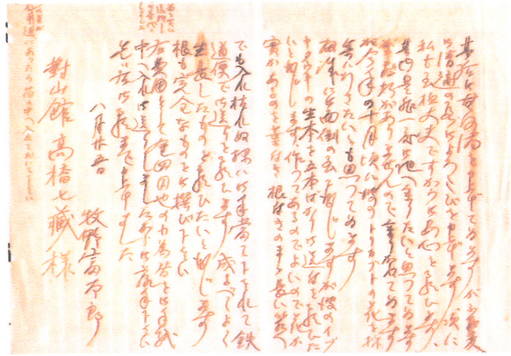
この講習会に、上野（米原市）で「対山館長生園」を経営する髙橋七蔵（1888～1951）の姿がありました。対山館は、大正 14 年（1925）、髙橋が登山口に設立したタイル張りの百草（薬草）風呂を売り物とした旅館で、薬草や山菜の集荷、植物標本や絵葉書の生産販売、玉突きなどの娯楽施設などを経営していました。以後、牧野富太郎は対山館を定宿とし、この出会いが、髙橋の植物の知識を学問的知識に高め、髙橋が発見したギボウシは、牧野富太郎によって「シチゾウギボウシ」と命名されています。

同じ上野の堀與曽市（1878～1943）は、尋常高等小学校の教員でした。伊吹山文化資料館に堀が採集した植物標本が寄贈されています。標本は明治 31 年（1898）６月と８月に伊吹山で採集したものが最も古く、この年の８月２日に牧野富太郎が伊吹山で採集しています。おそらく当時 20 歳の堀は、この採集会に関わったことがきっかけで、伊吹山の植物研究に本格的に取り組みはじめたものと思われます。講習会がおこなわれた明治 39 年８月４～10 日の標本もたくさんあります。

くしくも、講習会がおこなわれた明治 39 年の 11 月。多賀左京（～1992）が春照村大字大清水（現米原市）で生まれました。多賀の標本は琵琶湖博物館に寄贈されており、昭和２年 10 月 16 日・17 日に比叡山で採集したものが最初です。この両日、牧野富太郎は大阪植物同好会主催の採集会で比叡山に招かれ指導しています。高島郡で教員をしていた多賀は、この採集会に参加していたようです。生前、牧野富太郎との交流についても話しておられたといいます。

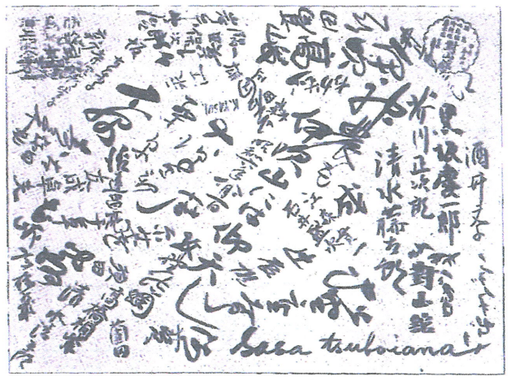
牧野富太郎の指導を受けた各地の研究者が地元に密着して標本採集や植物分類に励み、その結果はのちの日本の植物研究に重要な役割を果たしていきました。伊吹山における、坂田郡教育会の活動をはじめ、髙橋七蔵や堀與曽市、多賀左京の取り組みがその好事例といえます。牧野富太郎が伊吹山の植物研究に果たした役割は、とても大きいものでした。

（髙橋順之）



▲牧野富太郎から高橋七蔵への書簡

▲牧野富太郎（左）と高橋七蔵



▲寄せ書き「神農も伊吹山には仰天し」（昭和６年）

▲堀與曽市氏採集標本